

陽明学関係書 紹介と短評

○吉田和男著『現代に甦る陽明学』

—『伝習録』(巻の上)を読む—桜下塾講義録

平成十八年四月第一刷 B 6版 318頁麗澤大学出版会刊

吉田和男先生の著書については、本誌第12号(2000年)に『桜の下の陽明学』を紹介した。京都東山にある桜下塾で、毎月第一土曜に『伝習録』の輪読・読解をして上巻を読み終わったところで、それまでに講じたものをまとめたのが本書である。

本書は、第二章の「格物」から始まる、「良知」「心即理」「天理人欲」「知行合一」「事上磨錬」「万物一体の仁」という七つのキーワードについて、それぞれの意味するものを、その語自体の持つ意味から、現代に生かす意味までを読みとるといふ立場から読んだもので、そのキーワードがどのような時と場所と場合とに生きるかを、分かりやすく説いている。

「良知」に述べるところから少し抄出すると、「王陽明の思想内容を一言で言えば、すべての人はこの良知をすでに持っているが、人欲・物欲がそれを覆い隠しているので、人は良知を発揮し得ないのだ、ということです。」(P88)と述べ、従ってこの良知を得るために、王陽明は人欲を排し、実践を強調することに關し、塾生と議論したことを次のように述べている。「ただ良知だけですべてがわかるのかという点について、私も桜下塾でもよく議論しました……実践の

理と科学としての理は違うのではないか、また、前者は倫理の理であり、後者は論理の理ではないかとも議論しました。心の良知にしたがって行動することは理解できても、その良知とは何か、良知を磨くのはどうしたらよいかを修得するのはなかなか難しいことです。」(P97)というように説き進めています。

今日、このような陽明学の考えが、現在の社会では殆ど聞かれることがないだけでなく、問題にもしなくなっているが、陽明学が教える心こそ、現在の日本が忘れているものだと言はう。そして本書を執筆したのは、「伝統的な儒学のあり方としての陽明学を日本に再び甦らせることが必要であると考えたからでした」(「あとがき」と述べられているところに表れています。そして「陽明学を通じて現代の精神を考える書」として読んでほしいと結んでいます。

○小島 毅著『近代日本の陽明学』(講談社メチエ369)

二〇〇六年八月初版 講談社 B 6版 231頁

まず最初に小泉前首相の靖国神社参拜の話から始まるように、陽明学について学ぼうなどと思つて本書を手にとつたものは先ず驚かされる。そして靖国神社は儒教教義に基づく社で、神道の宗教施設ではないという。そしてこれに關して、水戸学や武士道がとりあげられ、そこに陽明学がからまつて説かれているのである。

このように、従来の陽明学に対する認識をもって読み始めると、このような切り口もあるのかと、既成の陽明学を当然のものと考えている者には驚きと違和感と反省させられる面のあることは私だけではないでしょう。

ここで取り上げられている思想家をあげると、大塩中齋、水戸学の藤田東湖から吉田松陰。明治維新後の三島中洲・三宅雪嶺・内村鑑三等から国家主義者や右翼と言われる人達。そして最後に安岡正篤、そして三島由紀夫の陽明学（といわれるが、そうでないという）までを分析し批判的に論じている。

思想を客観的に理解する者は興味をもって読めるが、内側から理解し、実践する者はどのように読むだろうか。

○林田明大著『財務の教科書―「財務の巨人」山田方谷の言動力』

二〇〇六年一〇月初版 三五館 B6版 365頁

本書は、第一章の「朝は四時から働けという家訓」から第十五章の「現代に息づく方谷の精神」まで、十五章にわたって、山田方谷の人生を描いたもの。

山田方谷には、山田準編纂『山田方谷全集』があり、山田琢著『山田方谷・三島中洲』（『双書日本の思想家』41）があり、文章については、浜久雄著『山田方谷の文―方谷遺文訳解』、詩については、宮原信著『山田方谷の詩 全訳』がある。また矢吹邦彦著『炎の陽明学―山田方谷伝』同『ケインズに先駆けた日本人―山田方谷外伝』などの書もある。それらを読破して得られたものだけでなく、関係ある人々についての資料から得られた、数多くの知識により、非常に詳しくまたおもしろく描いた伝記である。本書を読むと、この時代の、また陽明学や陽明学者などにつきいろいろの知識が得られる。それだけでなく、ちよつと寄り道をして、考え方に関係あるという意味で、氏の得意とするシユタイナーや、ゲーテ、ドライ・

ラマの話までがあり、現代化する意味で、現在の経済人の陽明学思想の実践者までが登場する。この人達は、すでに氏の『真説陽明学入門』や『雀鬼と陽明』などに登場していた人だが、研究書というわけではないが、啓蒙する意味で大切な書といえよう。

○『全訳本王陽明全集』（全六巻）

―曾國藩終生研習的書 儒家三大聖人之一―

主編 楊光 副主編 姜波

編集委員 李林生、李艷玲

一九九七年八月 北京燕山出版社刊。B6版、3260頁。

本書については、前言に明の隆慶六年（1572）、謝延傑の刻本に基づいて、中華民国二十四年の沈卓然の重編王陽明全集序を付して刊行されたのを全訳したものである。

訳者が誰かは記載がなく、ただ原文と訳文があるだけのもの。

○『陽明学刊』第一輯

主編 張新民

二〇〇四年十一月 貴州人民出版社 刊

張尚徳「論王陽明的悟道」

徐明徳「王陽明对中国心性哲学的詮釈」

錢明「譜牒中的王陽明逸文見知録」

張明「王陽明与黔中王学」

他に儒学思想研究の論文等、六篇が収められている。

（正田啓佑）